

落窪物語の笑ひ

大原, 一輝
香川県立主基高校教諭

<https://doi.org/10.15017/12380>

出版情報 : 語文研究. 3, pp.9-15, 1955-11-30. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

落窪物語の笑ひ

大 原 一 輝

落窪物語は語彙語法上からその成立年代については若干の異論が見られ、多少後世の手が加へられてゐるとは考へられてゐるものの「げに交野少将もどきたる落窪の少将などはをかし。……」（枕草子春曙抄）と引用されてゐる所から、その原型は枕草子成立以前に成つてゐたものと見られ、その内容には平安朝の面影が多分に留められてゐるものと見て差支へなからうと思ふ。さうして宮廷生活を中心とする当時の物語の中にあつて、この物語の占める位置は継子いぢめの家庭紛争譚であるといふ所に、その一つの特色を見出すことも可能であらう。しかしその主題となつてゐる継子いぢめについて見る時には、かの宇津保物語の「忠こそ」や、源氏物語の「継母の腹ぎたなき昔物語も多かるを」（蜃）の詞を俟つまでもなく、女君の「いかなる

罪を作りて、かゝる目を見るらむ、継母の憎むは、例のことに人も語る類ありて聞く」（巻一）によつてもその一般的なものであつた事が分るのである。従つて、かゝる物語には一般に継母子間の虐待と復讐といふ対立的構成要素が考へられ、そこには何らかの残酷陰惨な葛藤や悲哀の暗い世界が描かれるのが普通であらう。事実この物語の内容も第一部継母源中納言忠頼の北の方の落窪姫君虐待、第二部男君左近少将道頼の継母への復讐、第三部男君、北の方面派和解といふ構成に於て把握されてゐる。しかしこの物語では陰気な暗さや悲哀の世界は遠く後方に押しやられて、男君、帯刀、阿漕、典葉助、兵部少輔等の示す「笑ひ」の輕妙滑稽な明るい世界が遙かに強く感じられ、そこに又「落窪」の世界の持つ特色が印象づけられて來てゐるのである。

試みにこの物語の中から「笑ふ」「笑む」の語を拾ひ出して見ると約百例に近い多数の「笑ひ」を数へ得るのもの之

を裏付けるものであらう。この中「笑はる」等の受動的なものや、「世の笑はれぐさ」、「人笑はれ」等の名詞的なものは殆ど数へる程しかなく、大多数のものが対象に対して笑ひかける能動的なものである。次に之を人物別に見ると、男君二四、世の人々（物見の人々、殿上の君達等を含む）一五、帯刀一〇、女君一〇、蔵人少将七、阿漕六、典薬助四、北の方三、以下男君の従者達、女君付きの女房達を始め源中納言忠頼、男君の父大臣及び北の方、兵部少輔及びその供人、男君の乳母、若君、北の方の供人の順になつてゐる。即ちこの物語に登場するすべての人物が笑ひ笑はれてゐる訳で、落窪物語はあたかも「笑ひの文芸」の観を呈して来てゐるのである。しかも之等の笑ひは北の方派よりは男君派の方に三倍乃至四倍の多数をもつて見られるのである。また之を第一部について見れば、女君垣間見や、雨中微行の際に於ける「物忌の姫君」や「麝香の香」問答等を始めとして、男君派の笑ひには、男君帯刀主従、帯刀阿漕夫妻の諧謔的楽天的な笑ひが躍如として描き出されてゐる。さうして之はまた、女君に縫物をさせる北の方の「あざ笑ひ」や女君の消息を落して「死ぬる心地す」る帯刀に向つての蔵人少将の嘲笑、女君幽閉に「口は耳もとまで笑みまけ」て喜ぶ典薬助等の北の方派に見られる冷笑嘲笑とは明かに対称的に描き分けられてゐるものである。蓋

し物語の中に於て人物の笑ひが描写されることは自然であり、又、北の方派の冷笑の如きは、その物語中に於て占める位置の上から言つて至当であるとしても、前述の如き多数の「笑ひ」を持つこの物語の特性、就中被虐者女君の側に立つ男君派の諧謔的楽天的笑ひは、その多量性と共に本来明るい笑ひの世界とは懸隔する継子物語の中にあつては特異な存在であると言へよう。次にこの物語の構想を追ひつゝ、男君派の笑ひを中心とその展開様相と展開の基底にあるものを眺めて見ようと思ふ。

二一

落窪物語の内容が三部に分けられて考へられることは既述の通りであるが、第一部と第二部の間には北の方男君両派の間に夫々虐待と復讐が対応の妙を得た強い因果律によつて構成されてゐることは明らかである。即ち第二部の所謂面白駒事件を始めとして清水詣途中の車争ひ及び参籠、賀茂の祭の折の車争ひ、三条邸乗取等に見られる男君派の報復は第一部の女君落窪幽閉、典薬助事件、北の方石山詣等に対応して描かれてゐるものである。之は後朝の文に四の君の髻君の正体が暴露された北の方に対して「死ぬる心地すること、かの落窪といふ名聞かれて、思ひし程よ

りもまさる心地すべし」(面白駒事件)といひ、参籠の局を横取られた北の方に対しては「苦しきこと、落窪の部屋に籠り給へりしにもまさるべし」(清水詣)といふ作者は、女君の「かの石山詣の折、ひとりえり捨て給ひしも思ひ出でられて、心憂し」といふ加茂の祭の折の車争ひでも「乗りたる人の心地たゞ思ひやるべし」と北の方派に対して冷やかな傍觀的態度をとつてゐることによつても、その意識的な対応的描写の中に応報の冷理が明白に認められるものである。

次に「笑ひ」の面から第二部を眺めると、その数量から言つても三部中最も多く見られ、特に「人々の」の笑ひが著しく目立つて見える部分である。第一部の北の方派の冷笑嘲笑と対称的に描かれてゐた男君派の明るい楽天的な無邪氣さを持つた笑ひは転じて北の方派に対する報復的なものとして積極性と執拗性をもつて第一部の女君に対して与へた北の方派の冷笑嘲笑への対応として描かれて來てゐるのである。即ち第一部の終りに見られる典藥助の失態が北の方を始め「ほの聞く若き人」からも「死にかへり笑」はれ、「いとゞ人々笑ひ死ぬべし」と言はれる所から北の方派は「笑ふ」立場を失つて、専ら「笑はれる」立場に廻されてゆくのである。例へば「さすがに笑みたる顔、色は雪の白さにて、首いと長うて、顔つきただ駒のやうに」「對

ひ居たらむ人はげに笑はではえあるまじ」き身に可笑性を帯びた兵部少輔については「ただ今この君、大臣がね」と「笑みまけ」る北の方や「うち笑み」て後朝の文の返しを四の君に促す源中納言忠頼等の満足感も「心ひとつにをかし」ければ帯刀に語つて「笑ひ給ふ」男君の策計とは知らず、髻君が「面白の駒」であることを知つた人々に「あさましうて」「え念せずほほと笑」はれてしまふ。この人々の哄笑は更に藏人少將の恥辱と忿懣の自嘲自棄的笑ひと相俟つて男君派の報復奏功と愈々北の方派の敗北をそのまゝ物語つてゐるものである。

即ち藏人少將は「はなばなと物笑ひする人」で「笑ひ給ふこと限りなく」「面白の駒なりけりや」とて「扇を叩きて、笑ひて立ち」「こはいかなることぞともいひやらす笑ひ」、人をも我をも「笑ひ嘲弄し給」ひ、やがて北の方派を去つて行くのである。この事件で少輔の供人が、主の「かく笑はるる」を知らず「食ひののしりて座に居並みたる」場面は又北の方派に対する皮肉な側面描写であらう。作者は明らかに「笑ひやる」側、男君派の立場に立つて北の方派を冷たく傍觀的に扱ふ態度を示してゐる。人々の哄笑嘲笑に認められる男君派の復讐の成功は続いて第二の報復清水詣の車争ひや参籠の場にも見られる。北の方の車が堀に墜ち、局を横取された所の男君方従者達の「笑ひ」

は何れも相手方に対するさげすみと群衆性を持つたものであり、決して偶発的なものではなかつた。「かの人々は笑はせよ」といふ男君の命を受けた帯刀が「若うはやれる者にはやしていはせて笑ふ」計画的なものであつて見れば、之も面白駒事件同様男君の意識的報復手段として描かれてゐるものである。次の賀茂の祭の折の車争ひでは例の典葉助は男君派の人々に打擲され「物見る人」に「ゆすりて笑はれ」、北の方の車の失態に対しても「下藤の物見人どもわななき騒ぎ給ふこと限りな」き有様で、世間では専ら「このことをいひ笑ひののしる」状態となつて、此処に世人をも交へた群衆的哄笑嘲笑が、男君派の意識的計画的挑戦的報復の重複と共に高まつて来てゐることが窺へるのである。最後に三条殿について来訪した北の方の長子越前守や北の方が女君に与へた古い鏡の箱に対する女房達の「笑ひ」にも北の方派に対する嘲笑的なものが見られる。

北の方派が報復の憂き目を受ける以上の如き第一部の「笑ひ」の特色は、北の方派に対する群衆性といふ背景をも加へた男君派の積極的且つ意識的な嘲笑哄笑にあると言へるであらう。さうしてそのやうな「人々の」笑ひの背後には作者自身の——読者の存在とその期待と興味とを意識してゐる作者自身の笑ひにも見られるのである。ともあれ男君派の笑ひは明らかに第一部で女君に対してなされた北

の方派の冷笑嘲笑に対応的に描かれたものであり、之等の笑ひが報復のものではないにしても、男君の詞「かの人々笑はせよ」に徴しても、そこに意識的な報復的笑ひの意味が認められるものであらう。

しかし反面之等の笑ひを第一部の無邪気な明朗楽天的な男君派の笑ひとの対比に於て見る時には、むしろかゝる対象に対して意識的な執拗さをもつて嘲弄侮蔑的に投げかける笑ひそれ自体は決して高く評價されるべきものでないことは明らかである。即ちかゝる「笑ひ」の翻弄的可笑的報復は、楽天的「笑ひ」の主人公男君派の復讐には相応したものであるとはいへ、又仮に作者の性格や性別、或いは読者の興味に対する意識等を考慮に入れ、許容したとしても、男君派のかゝる笑ひの中には笑ひそのものとしての下向性が指摘されるのである。さうして又、それがかへつて物語自体の弛緩と読者の倦怠感を齎してゐることも否定出来ないものであらう。

三

次に第三部はいはゞ北の方の男君両派和解の場であり、それは両派対立の解消、事件の收拾といふ意味に於ても第二部との対応に考慮が払はれてゐる。第二部ではたえず男

君派の立場にあつて物語をその意識的報復的な笑ひの世界に進め、北の方派に対しては一片の同情的措辞をも示さず客観的批判的な冷静な態度を執つて来た作者は、第三部に於ては之を情的な立場に於て取扱ひ、円満な解決をめざして前段に見られた報復の類型化乃至は飽和的狀態の脱却による物語の停滞感からの開放をも計つてゐるのである。即ち源中納言に対する法華八講・七十賀、越前守の悔悟と源中納言の遺言及び遺産処分等に於ける男君の態度や、藏人少将の三の君への便り、四の君の筑紫下りと面白の駒の文等に北の方派への仁愛乃至は第二部での破綻に、不自然さと不充分さを含み乍らも、何らかの結末をつけようとして、冷やかにつき放してきた北の方派を救ひ採らうとする作者の意図が見られるのである。従つて第三部を「笑ひ」の面から見れば和解の場もふさはしい、なごやかな笑ひが見られるのは当然である。

四の君の筑紫下りに當つても「我やはこのことはせし。

……悲しき目を見せ給はむとて、腹ぎたなきわざをし給へるなりけり。」といふ北の方に対して「笑ひになむ笑」ふ男君夫妻、祖父大臣の孫に対する慈愛にほゝゑみ「笑ふ」男君、源中納言の遺産処分に當つての「などいところがちには見ゆるぞ、豪家と煩はしがりてあるか」と「うち笑給」ひ、「その夜、思ひ臥したりし本意の、皆かなひた

るかな」と「ほほ笑」む男君の笑ひは、若君との対面に「笑みまけ」、「この世につかうまつらで死ぬとも、大かた守護ともなり侍りて、など念じ侍る」と喜ぶ源中納言や「人は生みたる子よりも継子の徳こそ見けれ」と「例よりも心ゆき喜ぶ」北の方と共に、両派の人間の愛情を取り戻した平穩な融和的零屈氣が之らの笑ひの中に感じとれるのである。

其処には第二部で見られた如き激情的報復的な嘲笑や冷笑はなくなり、ゆとりと明るさ暖かさをもつた笑ひが、家庭的零屈氣の中に見られるのみである。この男君派の「笑ひ」を、第二部との対応に於て見る時、その否定的下向的なものに赴いた「笑ひ」が、そのまゝで停滞させられずに、人間の愛情に基づく肯定的な「笑ひ」の世界にまで上昇させられたものとも言へるであらう。

かくて物語は家庭的紛争譚のゆきつくべき作者の理想的結末がもたらされて来てゐるのであるが、この結末に迄進展させられるに當つては、この主導性が男君の「本意」に依るものであることを認める時、その背後にあつて、その基底をなして来てゐる女君の姿もまた無視出来ないものとなつて来るのである。即ち北の方の女君虐待に対して「ただ今もはひ入りて北の方をうち殺さばやと思」ひ（巻一）、「いかでこれ偷み出でてのちに、北の方に心惑はすばかりにねたき目見せむ」「北の方のいとねたく増くて、いかで

これにわびしと思はせむ」(巻二)といふ男君の報復も、「いみじう懲じ伏せて後には、喜び惑ふばかりかへりみばや」といひ「懲ずべき限りはあまた度してき。嬉しと覺ゆることは、ただ一度にて止みなばいとかひなし」(巻四)といふ北の方派への仁愛も「七十の賀せむ。我がせむと思ひし本意遂げむ」、「その夜思ひ臥したりし本意の皆かなひたるかな」(巻四)といふ男君の「本意」に基づくものであることは明かである。しかもその「本意」の基底には、面白駒事件に際し「かの君や憎かりし」と四の君に同情し、清水詣では「おとど後に聞き給はむこともぞある。かくな宜ひそ」と男君を「制し給」ひ、「今少し懲ぜむと思ふ心あり」といふ男君には「今はいかで殿に知られ奉らむ。老ひ給へれば、夜中暁のことも知らぬを」と父への慕情を訴へ、賀茂の祭の車争ひでは「我が人にはあらで督の君の人になりね。それこそかく物はしふねく思ひいへ」(以上巻二)と阿漕をたしなめ、三条殿乗取りを「またいかなることをかし出し給はむ。衛門こそけしからずなりにたれ。ただいひはやすやうに、いみじき御心を」といひ「我が身さいなまるるか」とて悲しむ(巻三)女君の存在を無視する訳には行かない事は、源中納言の遺産処分、北の方、三四の君に対する男君の恩恵的思慮が「大将殿の宜ふは、北の方(女君)の御心に従ひ給ふにこそ」といふ

越前守の詞によつても明かである。(巻四)

かくて北の方女君の対立に端を發するこの物語の結末への進展の主導力をなしたる男君の「本意」は、それと並行的に流れてゐる女君の「御心」を、その基底に認める時、第三部で見られる男君派の「笑ひ」の基底、ひいてはこの物語の「笑ひ」の發展基底に、女君の「御心」の働きを強く認めることが出来るのである。さうして之を第一部で描かれた北の方男君の対称的世界が、第二部に至つて男君の復讐的鬭争を描いて男性的世界の勝利を示してゐるものとすれば、第三部での男君派の勝利が、女君の愛情を基底においてなされたものであつて見れば、之を女性的な世界の勝利であるといへるであらう。また第二部を作者の知的客観的態度に於て見れば、第三部はその情的主観的態度に於て把握されるものであらう。之を男君の「笑ひ」の面から眺める時、第一部の笑ひには、土佐日記や古今集に見られる言葉の機知的諧謔性と通ずるものを認め、第二部の笑ひに、堤中納言物語や今昔物語の批判的客観的笑ひに通ずるものを認めるとすれば、第三部の人間的立場に於てすべてをその愛情の世界に包みとらうとする笑ひは源氏物語のそれに近いものであるともいへるであらう。ともあれ、この物語については「巻四一冊は蛇足なり」註と非難され、その他多くの不自然性が指摘されるとしても、単に「笑

ひ」の復讐をもつて物語の結末とするに忍び得なかつた所に、この物語作者の人間性の一端が偲ばれるのであり、又そこにこの物語の「笑ひ」の世界は、女君の「御心」に具象化された「あはれ」の世界を基底としてゐると言へるのである。しかしそのより具象的發展と完成は之を源氏物語に俟たねばならなかつたことと言ふまでもない。

註 藤岡作太郎氏「国文学全史平安朝篇」

尙引用文は所弘氏校註「落窪物語」（日本古典全書）に依つた。

お知らせ

明昭和三十一年は我が国語国文学講座開始三十周年に当りますので、本誌第四・第五号を合併して記念号を発刊の予定にしております。

幸い開講以来担任をなさつた先生方も御健在ですから、諸先生全部の玉稿を掲載出来ることと存じます。会員各位にも御賛同の上何とぞ多数御寄稿下さいます様お願い申し上げます。

締切 昭和三十一年四月三十日（四百字詰原稿用紙二十枚前後） 七月下旬発行予定